

1943年製『鏡』に映るもの

宮内 妃奈

1943年、*New Republic* (2/8)号において、“Alabama Faulkner”というタイトルの書評が掲載された。William Faulkner と同時代に、雑誌を中心に短編を投稿していた南部アラバマ出身の作家 William March の4作目の長編、*The Looking-Glass* (LG) の書評である。Stanley E. Hyman によるその評価は、当時、マーチがいかにかにアメリカにおいて受容されていたかを伝えると同時に、作品の主題を端的に見抜いた数少ない研究の一つに数えられている。

It is about time someone “discovered” William March. True, there is a William March cult, but a man who has been writing for twelve years and has published six books that rank with the best American fiction being written should have something more than a cult and a quiet fame in the short-story anthologies. By now, March has explored his Alabama county almost as thoroughly as Faulkner has explored his Mississippi county, delved just as deeply into the recesses of the human personality, and come up with material fully as striking (if handled without Faulkner’s somewhat excessive symbolism of horror). ... “The Looking Glass” reiterates and amplifies the body of what might be called March’s “philosophy,” about as depressing a set of ideas as can be imagined. March seems to believe that all men must live in loneliness and isolation, their only possible communication “lies,” but that the threads of their lives are nevertheless inseparably bound together. He tends to see all people as either mentally or psychologically deformed, and all relationships, as only endless variants of sadism and masochism, hatred

and answering love, murder and expiation. His books may be lower-keyed than Faulkner's, but they are quite as lively. (Underline is added)¹

マーチのデビュー作（長編）は、第一次世界大戦に従軍した自身の経験を基にして描かれた作品、*Company K*（1933）であったが、2作目以降は、作品の舞台を南部へと移し、フォークナーが創造したYoknapatawphaのような世界、Pearl Countryに生きる人々を描いた。² 今作*LG*は、1916年の9月のある1日を軸として、それまで度々短編に描かれていた町Reedyville（Pearl Countryの一端に位置する）の複雑に絡み合う家族・人間模様を、19世紀後半から1942年（作品の現在）に至る歴史物語として描き出すものである。

出版された当時の*LG*の評価は、Roy S. Simmondsによれば、およそ55%は熱狂的なもの、残りの15%は否定的、30%は無関心だったという。³ 批判的な批評の多くは、『鏡』というタイトルにも暗示される、作品における精神分析的意味合いに嫌悪感を示すものだった。*Montreal Gazette*（1/30）に寄せられたG. J. Fitzgeraldの書評には、マーチの作品におけるユングやクラフト＝エビングの理論への傾倒が読者を「冷静」にさせること、またScott Georgeは、*LG*について“no novel, but a trip through a psychological zoo”（*Nashville Morning Tennessean*, 1/24）と表現し、Diana Trillingは最も辛辣に“... all Southern novelists can't be themselves crazy, much as a reader unacquainted with their territory may sometimes like to think they are—Mr. March is rather too coy with his psychopathology to hold even our morbid interest.”（*Nation*, 1/30）と述べている。⁴

当時の否定的な評価における、作品の精神分析的要素への嫌悪は、時代が持つ感覚よりマーチが鋭敏な感覚を持っていたことによって生じた齟齬であると推察することができる。フロイト、ユング、エリス、アドラーの作品に精通し、自らも精神科医にカウンセリングを受けていたマーチが、特に、今作品の主題として選んだ「ナルシシズム」⁵は、1940年代当時、未だ研究の発展途上であった。「ナルシシズム」に関するフロイトの理論が発表されて以降、それを基盤とした研究が続けられるものの、本格的な進展は、1970年

代以降、Heinz Kohut や Christpher Lasch らの出現後だったのである。1977年の William T. Going の研究は、マーチの業績を振り返り、LGにおけるナルシズムについて指摘しているが、深い分析には至らなかった。⁶ 80年代においてようやく、マーチの伝記を手掛けたシモンズによる研究や Beidler らによって、マーチの作品の持つ“universality”が評価され、作品に現れる様々な境遇の登場人物たちの“harrowed loneliness”に現代人が抱える苦悩を重ね合わせることができると評されるようになる。⁷ しかし、その後もマーチの作品が深く研究されることはなかった。高度な技術発展を遂げた現代の検索機能を持ってしても、入手可能な現存する LG についての研究論文は、無いに等しい。

本作には様々な時間軸が存在し、10以上の登場人物の物語が語られている。唯一読者が物語の一貫性を保つための手がかりは、1916年9月のある土曜日の午後、母 Ada Boutwell の頼みでリーディビルの町を駆け回る息子 Dover の視点である。ドーバーの目的は、怪我をして倒れた父 Wesley のために医者を呼んでくること、その医者に支払う3ドルのお金を借りて来ることであった。ドーバーが訪ねる先々の家族の歴史が回想という形で語られ、物語が展開するのだが、それぞれのエピソードは、マーチが短編で成功したことを証明するかのように完成度の高いものであり、また、精巧に絡み合っ

て一つの世界を作り出している。⁸

本論では、マーチが重要なテーマの一つだと述べている「ナルシズム」に注目して、作品に描かれている2人の人物像について考察する。「ナルシズム」をどう理解するかについては、精神医学の枠を超えて「ナルシズム的社会」の姿を暴露し、痛烈に批判したラッシュの *The Culture of Narcissism* (1978)、それを踏まえて、個人のナルシズムを文化・社会システムの歪みと連動するものとして捉える Alexander Lowen の *Narcissism: Denial of the True Self* (1985)、また、自己愛の構造について重要な役割を果たしたコフトの理論を参考にしている。21世紀の今、人々は益々「より良い発展」を求めて、技術の進化のために飽くなき競争を続け、ラッシュの嘆いたナルシスティックな社会を突き進んでいるかのである。社会のナルシズムと個人のそれとが、まさに「鏡」の関係であるとすれば、マーチ

の描く人物像は時代を超えて、現代人の「鏡像」となり得るかもしれない。

(Manny Nelloha のケース)

作品に登場する人物は皆、後悔、不安、狂気といった闇を心に抱え真実の愛を求めている。中でもドーバーが助けを求めに行った医者、Dr. Snowfield は強烈な偏執病的ナルシシストの一人である。ナルシシストとは、ローウェンの定義を用いれば、自分はこういう人間であるべきだと思うイメージと自分が現実にはどういう人間であるかというイメージとを区別できず、現実の自己のイメージが自分にとって受け入れがたいものであるがために、理想化されたイメージに同一化して行動する人である。⁹ もともとリーディビルの住人であったスノーフィールドは15歳で町を去り、それから16年の時を経て名前と風貌を変えて戻って来た。彼は、当時流行りのリーゼントスタイルの髪形に口髭と顎鬚を蓄え、高級服に身を包む医者として、町の中心地にオフィスを構えたのである。リーディビルの人々は、「なぜこれほど都会的で、才能があり、見るからに裕福な若者が自分たちの町を選んだのか」¹⁰ と訝しむが、まさか彼が、昔、町外れで廃品回収屋を営んでいた Nelloha 家の息子 Manny であるとは想像もつかない。マニーは名前を変える以前の現実の自己、すなわち廃品回収屋の息子という、経済的にも階級的にも周縁的な存在、から脱却することを望み、強烈な野心と誇大妄想によって「理想のイメージ」と同一化し、名前も地位も異なる全く別の自己を確立することに成功したのである。

彼の内面奥深くに潜在するパラノイアは、明らかに出自に起因している。彼は「どこからともなくリーディビルの町に」(38) やって来た「素性不明の」(38) 余所者の両親が、様々な不用品や廃品を回収して、主に黒人を相手に拙い英語で商売をしていることが受け入れられず、恥じている。とりわけ、彼らが自分たちの第一言語であるはずのスペイン語でさえも正確に話せないこと、また、彼らが他人の捨てた物を買ひ、彼に与えていることが許せなかった。

...shame was the core around which his tangled thoughts and his

tangled emotions shaped themselves endlessly. Some of his shame was grounded in the remediable fact that his suits and caps and overcoats were the recognizable castoffs of others which his father had bargained for on the streets of the town, and had bought after so much sighing, ... Often he was conscious, as was everybody else in the school, that he was wearing a coat or a pair of pants which one of the boys in his class had discarded, as worthless, some months before. (40)

彼が両親を理解できないように、彼の「屈辱」を両親は到底理解しない。彼らの言い分は、「あなたが着ている服は、ちゃんと洗濯して修繕したから、新しいものと何ら変わりはないよ。温かくて実用的なんだよ。」(40) という本質的なものであった。

マニーの両親が物の「実用性」という本質的な部分のみを見ているとすれば、彼は物を持つことによる「体裁」に拘る。これはラッシュの指摘する20世紀初頭の人々の精神構造—所有することで得られる「威信・豊かさという幻想」を求めて、実質ではなく「見てくれ」のために需要を促すアメリカ物質主義によって生まれたもの—と相違ない。¹¹ 技術が進歩し、大量生産・大量消費によって物が溢れ、メディアが大きな役割を果たすようになった結果、社会における様々な経済的、階級的「格差」が浮き彫りとなり、現実の自己イメージ以上のものを欲する「ナルシスト」が増えたとラッシュは指摘するが、メディアが扇動する「より良いもの」に同一化しようとする彼らの意識構造は、以下のものであった。

The narcissist divides society into two groups: the rich, great, and famous on the one hand and the common herd on the other. Narcissistic patients, according to Kernberg, "are afraid of not belonging to the company of the great, rich, and powerful, and of belonging instead to the 'mediocre,' by which they mean worthless and despicable rather than 'average' in the ordinary sense of the term." (*The Culture of Narcissism*, 84)

マニーもこの類型に漏れず、自分の理想イメージを「富」「名声」を持つ者に求めた。ただ、加えて、彼が南部において特権を握る「白人」に異常な拘りを見せたことは重要である。これは、南部という地域において、「権力」あるいは、「富」によって築き上げられたものの最終基盤が、「人種」というカテゴリーに根差していることを示すものであるだろう。ネロハ家は、南部リーディビルにおいて、主に黒人を相手に商売をし、経済的にも社会的にも階級的にもマージナルな境遇だが、白人家族である。それにもかかわらずマニーが「白」に執着する原因は、彼自身の家族の「バックグラウンド」が曖昧であることに起因している。彼は何気なしに友達が言った、「マニーの家族はキューバから来たんだろ、それかその辺りの地域から来たんだと僕は思うんだけど、でもだからと言って、彼らが『黒んぼ』ってことにはならないだろ？」(42)という言葉に、彼のアイデンティティが大きく揺るがされることになる。

...he[Manny] remembered that he, too, had lived on an island somewhere, as Rance had thought possible; and on that particular island there had been no white people at all, if his memory could be trusted. ... he could no longer control the flood of his thoughts. ... There had been various shades of people on the island: pure black, yellow, brown, light brown—and, of course, themselves. If the other people were not white, what reason had he for assuming that they, the Nellohas, were white?
(42-43)

自分は本当に白人なのかという疑念について、彼は何度も両親に尋ねようとするが、結局、結果に対する極度の不安から真実に対峙することができない。両親に対する「恥」の概念は「懐疑」(43)へと変わり、強迫的な不安は解消され得ないままマニーの心の奥に妄想となって潜在し、両親への暴力という形となって現れることになる。両親との同一を果たせなかった彼は、経済的、社会的、人種的な不安、不安定性を消し去るために、「偏執病」的に Clarry Palmiller という一人の少女に「理想イメージ」を投影し、同一化

を図る。クラリーは、リーディビルの町の名家 Palmiller 家の一人娘で、「白すぎるくらい真っ白い」(46) 肌の、皆から愛される存在であり、マニーの「偶像」としては申し分ない最適な人物であった。彼は、「彼女が完璧に真っ白である限り、自分は黒人になりえない」(47) という病的な解釈によって彼女を自分の一部分に、やがては全てを取り込んでいくのだった。

マニーはクラリーのパーティに出席できなかったことをきっかけに、両親と共にリーディビルの町を去るのだが、医者を目指して大学に入った後もなお、クラリーへの異常な偶像崇拜は消滅することがなかった。送られるはずのない彼のクラリーへの手紙は、根底に怒りを蓄えた病的な愛の言葉を綴っている。

Are you angry with me because I forgot you for so many years? You must not be, my lily, my white one! ...You would not be, if you knew that I was not able to forget you, ...I stand ready, at this moment, to serve you forever with my hand and my heart—with my life, too, if you want that of me!

I do not want you in any physical sense, my beloved. ...I do not even ask to take part in the realities of your life. It will be enough for me to know that you are alive and white and immaculate! ...Do not betray me, my love! Do not destroy my last hope! Remain forever the one pure, incorruptible thing in this hideous world! (62-63)

そして、もはや彼女から離れて暮らすことができなくなった彼は、自分の名前を「白」を連想させるスノーフィールド＝「雪原」に変え、さらに屈折した心理状態でリーディビルに戻って来る。しかし、リーディビルでは、離れた所から彼女を「ストーキング」するものの、自ら接触することはなかった。

予期せず、ある時、実体のある彼女自身に直面することになる出来事が起こる。望まない妊娠をしたクラリーが、マニーだと知らずに、彼に墮胎手術を頼みに来たのだった。イメージと実体の齟齬に「裏切られた」(284) と感

じた彼は、故意に「消毒していない道具」(284)を手術に用いて天命を待つことにする。感染症によって彼女が死ぬば、自分も死ぬ、彼女が生き延びれば、それは彼女からの解放を意味する。いずれにせよ、彼は「彼女の死」＝「自分の死」を神の采配に任せた。その結果、数日後、彼女は死に至る。彼女の死によって、自分の死を覚悟したはずのスノーフィールドであったが、彼は得も言われぬ「幸福感」と「安心」(314)を得る。この「幸福感」こそが、彼の極限的ナルシシズムの表れであるのだが、その精神状態を理解するために、再度、スノーフィールドが道具を消毒せずに手術をすると決心した時の心理状態と彼女の死後の心理とを比較し、検証してみたい。

The more he considered this compromise [not sterilizing the instruments], the fairer it seemed to him. He was being more than just to her, he thought; he was giving her more than an even chance. The possibilities of infection, under the conditions he planned, were not nearly so great as people thought, and if she came safely through the operation, as she probably would, he would consider it a sign from some mysterious power, telling him that he was free of her at last. If she died, then he died with her; ... (Underline is added, 284)

彼は、彼女に「正当な」こと以上のことをしてやっ^てい^る、生き延びるチャンスさえ与^えてやっ^てい^る、と考^えてい^るよ^うに、死に至らしめるかもしれない罪悪感ではなく、「自分」の行為を正当化し、むしろ評価している。ここにスノーフィールドの、クラリーの「生死」に采配を振^ってい^るか^のよ^うな支配欲が見出せる。ただし、あくまでも最終の決定権は自分ではなく、神にあった。結果は、クラリーは死に、彼女に対して何らかの神秘的な力は働かなかった。畢竟、彼の死は当然であった。

He had taken it for granted that he must die, too, when Clarry died; and he had accepted it willingly enough, feeling that his life would be without a point, without a goal, if she should be taken from him. And yet,

nothing at all had happened to him: he still breathed, still spoke, still moved his long, thin hands at will. (314)

彼はクラリーの死を聞いた瞬間、死を受け入れる。しかし、予期したことは何も起こらなかった。すなわち、彼にとって「死」は自らの手に寄るのではなく、外的なものだったということである。手術前の彼の思考回路から解釈すると、クラリーは、「神秘的な力」に選ばれず死に至ったが、死ぬはずの自分が生きているということは、「彼が」神秘的な力によって、選ばれたということになる。彼女のみが死に、彼は生かされている。彼が得た幸福感は、何らかの「不可思議な力によって」支持され、同意されたと感じたことに寄るもの、すなわち、これはラッシュが、ナルシシストは自分の「理想イメージ」に近づく確信のために、「外部の全能の力」に頼り、最終的には、「神」と自分を同一視すると述べていることに通じるものである。¹²

実は、マニーの「全能の力」の持つ権力と支配欲への傾倒は以前にも見られていた特徴であった。彼は貧しい人々、抑圧された人々のために献身的に働こうとするが、それは彼が、何が正しくて何が間違っているかについての“arbiter”「意思決定者」(62)である限りにおいて、であったのである。彼が医者という職業を選んだのも、人に貢献するという「善意」の裏で、神にも似た「生死を決定する力」を持っていることが重要だったと推測できる。

マニーはクラリーの死後、医師を辞め、労働運動や人種運動に身を投じ、人々のためにアメリカ政治を批判しロシアへ向かう。彼のこの残りの人生について、ハイマンは“expiation”に時間を注いだ¹³と解釈しているが、果たして本当にそうだろうか。人々のためにスピーチを行っているものの、彼に共感した者はいなかった。結局、彼の「正義」は、誰の心も動かさない独りよがりなもの、偽りの「イメージ」先行の表面的なものではなかったのだろうか。

(Ira Graley のケース)

本質的な「善」を認識できない独りよがりなナルシシズムと理想像に向かって健全に築かれる自己愛の境界線は何なのか。作品におけるもう一人の人

物、Ira Graley を読み解くことで、その境界にあるものに気づくことができる。

Ira Graley はリーディビルで売春宿を経営する女性 Violet May Wynn の私生児として生まれ、狂信的で非寛容な祖父母の下、身体的、精神的虐待を受けて育つ。祖父母にとって、彼が私生児であることは、神の祝福を得られない、善悪の区別を持たない、「動物」(162)と同じレベルであることを意味し、従って暴力を持って彼を更生することは当然の報いであった。祖父母以外の誰ともコミュニケーションが取れず、常に恐怖の中で成長したアイラであるが、彼はマニーと異なり、私生児であると言う「自己の卑俗なイメージ」によるナルシズムの闇に沈むことはなかった。むしろ、彼はコフォートの主張する「健全な自己愛」を手に入れることになる。コフォートは対象愛を重視するフロイトから脱却して自己愛の昇華を主張し、ナルシズム研究に発想の転換をもたらした人物である。健全な自己愛の獲得には、コフォートによれば、「共感」や「英知」(その他「創造性」や「ユーモア」)の獲得、そして、現実の自己の受容が必要であると言う。マニーとアイラを分けたものは、まさにその「共感」や「英知」による現実の自己受容であった。

ナルシストに共通する特徴の一つは、「共感」の欠如である。マニーにも、一度、他者の感情を共有することができたかもしれない出来事があった。それは、相応しい恰好ができないという理由でクラリーのパーティに参加する勇気が出ず、屋敷に忍び込もうとしたところをパルミラー家の使用人に見つかり、クラリーの母、Cindy と話をする場面である。シンディは、貧相な服を着たマニーの心情を察し、自分の失敗談を話すことで、彼の心を癒し、再度パーティの会場へ誘い出そうとする。しかし、雪のように真っ白な世界へ(60)と引き込み、外界を遮断してしまっていたマニーの心には、シンディの言葉は無益に響くだけだった。

一方、アイラは、家族でもなく全く見ず知らずの二人の男性の言葉に共感し、彼らを「理想像」として自己に取り込んでいく。一人目は、祖母の遣いで近所の店に行き、そこで出会った男性である。町では誰も声をかける者のいないアイラに、その男性 Ben Graley は名前を尋ねた。アイラはあまりの驚きに答えることができず、代わりに店の主人が彼の素性を嘲笑的に暴露す

るのだが、その時、ベンの言葉は、アイラに勇気と「確信」(185)を与える。

“Don't let people worry you,” he said. “What you are is no fault of yours. A lot of great men have been in the same fix and it didn't hold them down. ...So hand it right back to people. Say to them, ‘Wait twenty years from now and then see who's got a right to laugh at who.’” (Underline is added, 184)

アイラは、この出会いをきっかけに、この男性から名前をもらい、「アイラ・グレーリー」として生きる決意を固める。この「名前は、彼を他の人々から区別し、定義し、これまで無名の存在であった自己に生命を与え」(186)た。すなわち、別人になろうとしたマニーと異なり、名前によって初めてアイラという自己が生まれたのである。祖父から神の怒り(“Wrath”)という意味でつけられた、単なる呼び名でしかなかった「アイラ」は、一個の人格を持って祖父母の家を出、母への復讐を胸にリーディビルに向かった。

アイラはリーディビルにやって来たものの、水汲みや皿洗いなどの雑用をしながら孤独な生活を送っていた。アイラにもマニーのような「反社会的な」「異常な」精神状態(189)がなかった訳ではない。彼もまた、自分の空虚な境遇にやり場のない「怒り」が込み上げ、母への復讐を心に決めていた。そのような彼を救うのがポートウェル家の主人、ウェズリーである。彼は、自分の職場に水を運びにやって来るアイラに声をかけ、名前を尋ねる。その後、アイラに暴力的な態度を振るう同僚を戒め、アイラの話し相手となり、最終的にはポートウェル家で保護するのだった。アイラにとって、ウェズリーは人生で初めて会話を交わし、感情を共有することが許された存在となる。

ウェズリー家は、ネロハ家と同様に町の外れに家を構え、共働きで5人もの子供を育てる貧しい一家である。従って、ウェズリーが象徴するものは、富や権威、階級といったものでは決してなかった。彼がアイラにとっての「英雄」となるのは、「大きくて、健康的だろ、俺は。」(14)というウェズリーの言葉が物語るように、「強さ」や「包容力」、それらに裏打ちされた「愛情」によってであり、決して「経済的な」「階級的な」力によってではなかった。

その英雄像は、“a more spiritualized portrait of Wesley... a picture quite apart from reality, and one whose need was dictated not by the mind but by the heart.” (190-191) と、アイラの「感情」に裏打ちされているということが重要である。

また、暴力しか経験したことのないアイラが、愛情を受け入れたことについて、

It seems strange that this boy, who had known nothing in his life except abuse, should have so great a capacity for affection; but perhaps he, even more than others, knew that love was not a luxury to be indulged stingily, or bestowed capriciously; that it was something as important as air or light, more necessary, even, than food. (Underline is added, 16)

と述べられているが、愛情が「贅沢品」でないばかりか、「食べ物」よりもっと必要不可欠の「光」や「空気」と同等なものとして知っていたと指摘している点は興味深い。すなわちアイラは「愛」の尺度を「金銭」や「付加価値」で計ろうとしない、本質を見る人物であることが暗示されており、ここにもナルシズムに陥らない彼の性質が表されているからである。

さらに、アイラとマニーの決定的な違いは、向き合わなければならない事実に対峙できたか否かである。マニーは、自分が混血なのかどうかを両親に確かめる勇気がなかったが、アイラは、自分を産んで捨てた母親に会う。それによって、彼は、自分を過酷な境遇に追いやった怒りの象徴であった母の「作られた」イメージを払拭し、現実の姿、すなわち、憐れみを感じる実体に触れることができるのである。

...his mother, in reality, had been so different from his expectations that the cynical words he had meant to say to her seemed no longer appropriate. He had pictured her as being younger and more attractive: more like the actresses whose photographs he saw in magazines. He had expected to find a quality of stimulating depravity in her, a sense of

exciting sinfulness, but, ...she seemed not sinister to him, but pathetic and rather repellent instead. (209)

結果的に彼は復讐を誓っていたのだが、「自分がそれまで抱えていた憎しみや怒りは少しピント外れで、そこに重要性はないように思われ」(210)、その意味を失うのであった。

アイラにとって重要な三人目の人物は、リーディビル高校の校長である Professor St. Joseph である。アイラは彼との出会いによって、英知を身につけ、精神科医として人々に寄り添う存在となった。セント・ジョセフは、アイラについて “This young man is all feeling.” (217) と感じているが、まさに自己愛を単なるナルシズムに陥らせず、健全に昇華させるヒント（すなわち孤立せず、人と感情の共有ができること）がアイラの人物像には描き出されていると言える。

本論ではアメリカ南部における下層階級の二人の白人男性の成長について考察した。作品には他にも、町の有力者であるクラリーの父、Mr. Palmiller や、その息子で自殺したランス、ドーバーの姉で、町を追放されパリで歌手として成功する Honey Boutwell など、ナルシズムが人格形成に大きな意味を持つ人物が多く登場しており、その考察は現代の読者にも大きな示唆を与えてくれるに違いない。本論で取り上げたマニーのナルシズムは、現代において散見される「アイドル」を自分のものだと勘違いして事件を起こす熱狂的ファンの精神構造と何ら変わらないものである。

メディアや技術の発達、また、大量生産、大量消費による極端に物が溢れる現代社会において、大きな繁栄が享受される反面、その裏で失われているものも多い。ラッシュは、時代の進歩とともに歴史的連続性が欠如し、伝統が軽視され、人間同士の結びつきが希薄になっていると述べ、ローカリズム¹⁴の再評価を訴える。ローウェンも同様に、限界に気づかず、ひたすら進歩を追い求める現代において、人間が「限界」を知り、「不完全性」を自覚することで、“humility and humanity”¹⁵が生まれ、人に共感することができる、すなわちナルシスティックでない健全な自己を保持できると主張する。まさ

に、このローウェンの言葉を予見するかのように、アイラが精神科医として手に入れたものは、この“humility”「謙遜」であった。

Perhaps the basis of his [Ira's] success was his gentle, unconquerable courage, a thing which his patients recognized and understood even before he had spoken; perhaps the furious and the animal-like who, having no faith in men, had gone at last into the terrible country of their own minds, could yet find something to hold on to in the simple humility which they felt so quickly in him. (340)

ラッシュュが「ナルシズムの時代」を叫ぶ以前に、マーチは40年代に生きる人々のナルシズムな側面に気づき、それが破壊に導くことを危惧していた。彼はクローダーに宛てた手紙で「ありのままの自分を見つめ直す」必要性に言及している。

If, ...there is one persistent thought or one ineradicable theme which runs through everything I have done, it is this: Man has developed as far as it is possible for him to develop from the outside. If he is to survive, he must turn now and examine his beginnings. He must deny nothing in himself in this appraisal: he must see himself not as the Church or society thinks he should be, but as he is. With this knowledge he must start another painful development—from within this time. If he cannot do this, then he will perish.¹⁶

まさにこれは、コフォートが「芸術家は科学的な認識の先を行く」という芸術の先見性を証明するものであるだろう。20世紀半ばにマーチが鳴らした警鐘は、未だ現代人の心に訴える力を持っている。ナルシスティックに進み続けている現代だからこそ、読み直されるべき作品であると言えるかもしれない。

(註)

- 1 Hyman, p187-188.
- 2 マーチが描く戦争小説の世界観については、宮内 (2015) において、*Company K* の前身となる 2 編の代表作、“Fifteen from Company K” 及び “Nine Prisoners” を取り上げ紹介している。
- 3 Simmonds, *The Two Worlds of William March (TWWM)*, p182.
- 4 これら *LG* に関する書評は、*William March: An Annotated Checklist (WAAC)* の p152-166 を参照した。
- 5 *TWWM* によると、マーチは Richard Crowder に宛てた手紙の中で、本論の序文で引用したハイマンの批評が “the most penetrating review ever written concerning his work” (p168) だと述べる一方で、彼が指摘していないもう一つ重要なテーマが「ナルシズム」であると明言している。以下、マーチの手紙文の引用である。“The theme of *The Looking-Glass* was man's inability to love an object other than his own image. ...The looking Glass, or the World, which reflects our own precious image is consistently used all through the book. ...Since man is so inescapably narcissistic, his loneliness is inescapable. ... I think the theme of narcissism is perhaps one of the oldest in the history of man.” (p 169)
- 6 William T. Going, p438. 彼は “At any rate, this novel needs closer study, for it is the heart of March's world and his ideas.” と述べるに留まっている。
- 7 Simmonds, *WAAC*, p77.
- 8 Simmonds は *TWWM* において、1956年に Robert Loomis が *A William March Omnibus* を作成するにあたって、*LG* から一つの “fine” エピソードを抜粋して掲載しようと試みたが、“its delicate but impeccable balance” が損なわれると判断し断念したことを明らかにしている。(p167)
- 9 Lowen, p 7.
- 10 *LG*, p61. なお、これ以降の原文の引用（訳は宮内による）は、頁数のみを本文に示す。
- 11 Lasch, p72.
- 12 Lasch, p84. ナルシシストの権力と支配欲への傾倒は、Lowen の第 4 章、神との同一視については p105-109 (Lowen) に詳しい。
- 13 Hyman, p187.
- 14 Lasch, p235.
- 15 Lowen, p225-226.
- 16 Simmonds, *TWWM*, p189-190.

(参考文献)

- Going, William T. "William March: Regional Perspective and Beyond." *Papers on Language & Literature* 13. 4 (1977), 430-443.
- Hyman, Stanley Edgar. "Alabama Faulkner." *New Republic*, 108 (1943), 187-188.
- March, William. *The Looking Glass*. Boston: Little, Brown and Company, 1943.
- Lasch, Christopher. *The Culture of Narcissism: American Life in an Age of Diminishing Expectations*. New York: W. W. Norton & Company, Inc., 1978.
- Lowen, Alexander. *Narcissism: Denial of the True Self*. 1985. New York: A Touchstone Book, 1997.
- Simmonds, Roy S. *The Two Worlds of William March*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1984.
- *William March: An Annotated Checklist*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1988.
- 宮内 妃奈 「21世紀に読む William March—もう一人の『失われた世代の作家』」『福岡女学院大学短期大学部紀要（英語英文学）』51号（2015），17-29.
- 和田 秀樹 『「自己愛」の構造 —「他者」を失った若者たち』講談社選書メチエ，Vol. 167 講談社，1999.